

令和6年度 第1回糸島市総合教育会議 議事録

【開催日時】 令和7年2月17日（月） 15時30分から16時30分まで

【開催場所】 糸島市役所 庁議室

【出席者】

（構成員）

月形 祐二市長（議長）、山口 幸美委員、松尾 実恵委員、宗 聖子委員

泊 義隆委員、家宇治 正幸教育長

（事務局）

中村 隆暢経営戦略部長、吉村 新一企画秘書課長、近藤 英介企画秘書課秘書係長

（教育委員会事務局）

小嶋 智嗣子ども教育部長、井上 正治教育総務課長、武田 巨史学校教育課長、

福田 貴史学校教育課企画監、中村 和恵教育総務課課長補佐

安部 祐子学校教育課教育指導係長兼指導主事

中村 悠毅学校教育課教育支援係長兼指導主事

野口 順也学校教育課主幹兼指導主事

（傍聴人）なし

【開会】

■月形市長

ただいまから、『令和6年度 第1回 糸島市総合教育会議』を開催する。

会議規則の規定に基づき、進行を務めさせていただきます。

【議事録署名構成員の指名】

■月形市長

会議規則第9条第3項の規定に基づき、構成員の中から1名を指名させていただきます。

『山口 委員』を議事録署名構成員に指名させていただきます。⇒異議なし。

【協議事項】

（1）中学生起業家教育の推進について

■月形市長

それでは、協議事項に入る。

まずは、『中学生起業家教育の推進について』を議題とする。

まずは、学校現場における現状について、担当課から報告をお願いします。

（※武田学校教育課長より、資料に基づき報告。）

■月形市長

中学生起業家教育の推進について、現状が報告された。
このことについて、皆様からのご意見をお伺いしたい。

[主な質問・意見]

■泊委員

地域との関わりというのが子ども達には大きな影響を与えるので、特に企業を含めて糸島農業高校や糸島高校など、いろいろな所と連携をするということが、子ども達にとって非常に効果があると思う。糸島農業高校でもいろいろな商品開発をしたり、模擬会社を作ったりしていた。糸島農業高校では商品開発がほとんどであるが、それ以外にも地域の課題について、農業高校は農業高校らしく課題を捉えていろいろな研究をしているので、連携することで、課題解決の道筋を少し年齢が上の高校生と行うということは効果があると私は思っている。

もう少し発展的に考えると、高校生の場合は実際にお金も動かすので、マーケティングをきちんと行う。どういうふうなマーケティングを行い、経費がどれくらいかかり、どの年齢層、どういうお客さんに対してどういう品物にニーズがあるのかということも、分析をしていく。そこまで中学生に求めるのがいいのかは難しいかもしれないが、起業するためにはマーケティングをきちんとしておかないと、ターゲットが定まっていない状態で商品開発しても上手くいかないのでは、そこを中に取り入れた方がいいと思う。そのためには、日本の教育の中で今足りていないところがいくつかあるが、起業家教育でいうと、小中高と金融教育をしておかないと、お金の扱い方を学校で取り扱うことがタブー視されているような状態があるが、商業高校や農業高校といった専門の高校では当然お金のことは勉強するので、義務教育段階でもある程度お金をどう管理していくのかということを経業家教育の中に入れていくと、少しは面白い幅のあるものになるのではないかと思う。

■宗委員

テレビ等に志摩中学校が出たときも拝見したが、子ども達の表情がすごくいきいきとしていた印象だった。今後の仕事の選択肢として、自ら起業することや何かを新しく始めることがあるということを学校で学んで知ることが、必要なことだと感じている。起業家教育に必要なポイントの一つとしては、失敗しても次のチャレンジがあるということを経業すること。いろいろなサポートがあって、失敗しても終わりではないことを学ぶことが大事であると感じた。いろいろな職があるが、人の役に立つ仕事がしたい、相手の喜ぶ顔が見たいなど、自分の中の「したい」気持ちに気づくことも大切なことなんではないかと思う。実際子ども一人一人の役割分担が違ったと思うが、今後の将来的に、生き方や自己実現につながるような、大人との出会いも重要だと感じた。今後の育成と

しては、子ども達の好奇心はすごくあると思うが、好奇心をさらに高めていただき、将来への仕事へのあこがれを、それこそ「糸島でこういうことしたい。」と思えるようなきっかけづくりになることが起業家教育ではないかと思う。

■山口委員

ものを作り出すことはもちろんであるが、その活動を通し、一学年の生徒がリーダーを中心にいろいろな組織を作り、各組織の中でどのように会社に貢献できるかを考え、一つの学年の子ども達が一つの目標に向かっていくという、教員が狙っている指導の一つを生徒自らが作っていつている。教員の力を借りずに自分たちの力で作っていくところに、すごく起業家教育の意味があるのではないかと思う。リーダーになる子、そしてそれを支える子ども達というピラミッド形式になるかもしれないが、それぞれの役割を充実して進めていけるというところが良いと思っている。最終的に自分たちの労働が収益に変わって行って、その収益が社会に生かされていく。貢献していく。そういったところに子ども達としては、すごく魅力を感じていると思う。ぜひ長く続けていき、もっと子どもの発想は豊かだと思うので、違う形でも進んでいければいいかなと思う。

■松尾委員

すごく面白い取り組みだと思う。起業家的資質ということは、会社を社長として起業していく。その中で一番大事なことは、いかに利益を出していくか。しかし、その利益を出すためには、人件費や必要経費を抜いたうえで利益を出し、その利益を基に次に事業に持っていく。会社とはそういうもので一過性で終わるものではないので、そのことをしっかりと植え付けて、その中で子ども達はいろいろなマネジメントや役割をしていく。「自分は社長に向いているかもしれないから起業家を目指そう。」とか、「自分はマネジメントや裏側の分野が得意だ。」とか、そういうことが少しずつ分かってくる。ただ会社の中にいてどういうことをやるとかだけではなく、自分の資質というものも見出していけるのではないかと思う。利益を出していかないと企業は続いていけないので、金融的な勉強というのも、銀行関係や投資などにも入って行って、もう少しプロフェッショナルな形を作ると、もっと広がって面白いのではないかと思う。ボランティアの延長にならないようにしなければならない。そこが起業家との違いだが、どこかボランティアの時点で終わっているなというところもあるので、そこは先生たちの指導になってくる。起業家教育の本質というものを、子ども達に植え付けてあげると、それこそ糸島から新しい起業が生まれるのではないかと思う。

■家宇治教育長

今子ども達を見てみると、全国学力調査などのテストで学力を図ることが多い。そうではなくて、子どもの主体性やコミュニケーション能力、最後まで粘り強くやる行動力、そして人と人との関わりの中で相手に頼りながらも自分の役割を見つけ出し活動する。

そういった力が求められているので、このような総合的な体験というものは、子ども達にとって非常に重要ではないかなと思う。去年の志摩中学校の社長は、たしか起業を目指すと言っていた。彼は色々な意味での組織を作り、会社の中の動きが悪くなってきたから、会社の中でマネーを作ったりした。そういったところで社員が働く意欲を高めていった。また、休耕地を自分たちで借り上げ、そこを活動場所にしたりした。そういうことも創造しながら進めていた。やはりそれぞれの部署で人が育っていく。今から先は、こういうことが非常に必要になってくるのではないかなと思う。

ただし、学校教育の悪いところで、固定化してしまう。この学年は何をしましょう。ではなくて、前原東中学校がやったように一クラスでやりたい。そういったものが一つの学校の中にいくつも生まれていくと、非常に面白い活動になっていくのではないかな。

先ほど出ていた金融教育。志摩中学校では出た利益を全て能登に寄付している。気持ちはよくわかるので否定はしないが、一部を今年の営業資金にすることも考えられた。そのような金融という側面から、どこで何を売ったらいいかを子ども達も考えているが、なかなか上手くいかない。そこには誰かのサジェッションがいる。それぞれの部署でどこかと連携しながら、というような形がこれから求められるような気がしている。そういう意味では子どもも非常に乗り気であるし、子どもに先生たちが触発されるという部分もある。教員の発想も大事であるが、子どもに任せるときに子どもの発想を上手く教員が引き出す。教員も併せて育っていつている部分もあるのではないかなという気がして、非常に面白い。

以前は中学生が職場体験だった。これは今はやめている。今は小学生に行っている。小学6年生に職場体験を持って行って、小学校からつながりを持ちながら、こういう活動を実施していくというのも、糸島の一つの特色になっているんじゃないと思う。ぜひとも子どもの発想を抑えないような形で進められたらいいのではないかなと思う。金融教育については、考えなければいけないという気がしている。

■泊委員

地域との協力というのが一番大事であるが、学校だけでは地域の企業とコラボするのは難しいので、市全体としてのキャリア教育の一環として、起業されてある方もしくは経営されている方など、いろいろな仕事の方に、仮の名称だが「仕事案内人」みたいな、中学校に来て直接講義をしてもらったり、いろいろな体験を話してもらったりなどを前段で行うと、中学生の子ども達にとっては、そこにいろいろなヒントが出てくるので、起業するためには地域の協力というのを、市全体としてバックアップしていただければ、より高度なものになってくるのではないかなと思う。

■月形市長

本当に糸島の教育というのが、学力だけではなくて、これからどう社会で生き抜く力を育んでいくかという意味で、今取り組んでいただいている起業家教育が、大きな意味を

持つものではないかと思っている。その中で子ども達に考えてもらいたいことは、地域のつながりをしっかり持ってもらっているが、地域の皆さんに対する感謝の気持ちをしっかり持ってもらいたいし、お金を稼ぐことの難しさも勉強してもらって、その感謝の気持ちが次の自分の夢につながるものになってもらうように、我々もしっかりサポートしていきたいと思う。

（２）英語教育・異文化理解教育の展開について

■月形市長

では続いて、『英語教育・異文化理解教育の展開について』を議題とする。学校現場における現状について、担当課から報告をお願いします。

（※武田学校教育課長より、資料に基づき報告。）

■月形市長

英語教育・異文化理解教育の展開について、現状が報告された。

このことについて、皆様からのご意見をお伺いしたい。

■松尾委員

糸島市の英語教育は進んでいる。福岡市と比べてみても進んでいると思う。英検についても補助金を出すということまでは福岡市もしていないし、まずもって学校で受けるということとはできない。受験ですごく有利であるといっても、大きな都市ではきめ細やかな対応ができていない。でも糸島市は、教育委員会がチャレンジをしてくれて、いろんなことをしてくださっている。国もデジタル教科書を作り、これからの英語教育に必要な音声、特に小学生は音声教育ということで、昔は先生たちがしなければならなかったものを、オンライン英会話やデジタル教科書を使って進めている。

あと一つ二つ提言をするとしたら、それをしっかりと定着させるためには、小学校の英語でいうと、インプットをさせるということ。それは、家庭教育の中で宿題などを通して、インプットをさせていく。そして学校教育では、できるだけアウトプット。これは小学校５年生６年生の課題になるが、あとの低学年に関しては、楽しみながら英語を学んでいただき、ALTの配置も今回増えたので、そういったことを進めていくと、更に底上げしていくのではないかな。今一番気になるのは、英語の小中連携である。もちろん中学校には英語の先生がいるが、そのまま小学校に下ろしてきて教えれば良いというわけではない。内容も全然違っている。ただ、中学校１年生のレベルが、小学校５、６年生に来ているので、難易度はすごく上がっている。そういう意味では小学校に英語専科の先生がいるので、その英語専科の先生と中学校の先生との連携というのをワークショップ等で行い、小学校ではここまで教えます、ここから先は中学校の専門の先生の方

が良いので、という風に上手く連携をしていくと、すごく底上げできるのではないかと
思う。

■宗委員

学校訪問等で、英語授業の子ども達の様子を拝見する機会がある。本当に子ども達の適
応力や柔軟性がすごく感じ取れ、1年生は身体全体で学んでいるなど印象深く残って
いる。やはり英語を学び続けていくことによって、子ども達の将来的な活躍の場にもつ
ながっていくのではないかと考えている。英語を学ぶにあたって、英語を好きになるこ
とが一番大事だと常々感じている。一步躓くと苦手意識が強く出るので、苦手意識を持
たずに、特に今は低学年のうちから英語教育が始まっているので、楽しく活動しながら、
子ども達が学ぼうという気持ちになることが大切で、興味関心を持ち意欲を高めるよ
うな授業をお願いしたい。また、オンラインでも授業風景を観させていただいたが、生
きた体験が非常に重要と思うので、更に力を入れていただきたいと願う。なによりも英
語教育の先生方はいろいろな対応で大変だと思うので、それに対する支援もよろしく
願う。

■泊委員

小学校に英語の授業は入ってきている現状にあるが、私が30歳のころには、韓国では
英語が話せていた。アジア圏内はほとんどそうであるが、母国語+英語がスタンダード
で、それからいうと日本はまだ話せない人が多いのが現状だと思っている。それは英語
を使う場所が少ない。日本語だけで事が足りている。外国では本の翻訳をするだけで
すぐお金がかかり、英語を覚えた方が早いという感覚になっており、日常会話は英語で
できるというコミュニケーションを取るようになっていくので、やはり子ども達にも
英語に触れるチャンスがある。今小学校でもイングリッシュウィークをしたり、一日英
語を使うイングリッシュデイをしたりしているが、基本的にはネイティブなスピーカ
ーのALTとかの数が増えて接触回数が増えれば、ごく自然に英語が生活の一部になっ
てくるので、英語力がもっと上がってくると思う。ALTを増やすということはお金もか
かるので大変だと思うが、なるべくネイティブスピーカーとの接触が多くなるような
機会を増やしていくのがいいのかなと思う。

もう一つの異文化については、小学校の授業を観にいったが、大変だろうと思う。
子ども達によっては親の仕事の関係で日本に来ているだけで数年後には戻るので、日
本語を勉強する意欲がそれほど湧いてこないなどあるので、非常に課題は大きいと思
う。少なくとも英語は世界共通のスタンダードではあるので、日本の文化になれてもら
えるような指導は難しいとは思いますが、英語教育と絡めて、外国から来ている子ども達を
どうにかサポートしていただければと思う。日本の良さをわかってくれることが、一番
大事なことだろうと思う。そうすることによって日本で生活していたことが面白かつ
たね、と言って母国に帰ってもらえることが、多少なりとも糸島の中でできればと感じ

ている。

■山口委員

外国籍の子ども達がこれだけ糸島にいるというのをみて、糸島も国際都市になったんだと思うが、このような世帯がこれからも増えると思うので、そのことをまず子ども達が知っていくということが大事。学校としてはそれを教えていくことが大事。それが当たり前の状態になる。積極的に伝えていくことが大事かなと思う。その中でもふれあいというのが一番かなと思うので、学校は大変かもしれないが出会いの時間等を多く設定し、それぞれの国の言葉や習慣、日本の言葉や習慣をお互いに相互理解をしていくものが多く設定されていけば、母国に帰られても「日本は良いところだった」と「糸島は良いところだった」ということにつながるのではないかと考えている。

■家宇治教育長

英語教育に今から先求められるのは、英語で物事を考えていくこと。環境問題であり、経済問題であり、いろいろな事に対する自分の考え方を持って行って、それで相手と交流ができる。こういうことが最終的に中学3年生くらいになると、必要になってくるのではないかな。そう意味で西南学院大学での中学生のイングリッシュキャンプを作った。この時に糸島の良さであったり歴史であったり文化であったり、こういうものをお互いに相手と交流して、自分の考えを持たないと話せない。他の教育活動と密接に関連しながら進めることが必要であって、話す相手ということになると、市長部局の中の国際交流等と連携や協働をして、いろいろな場面を作っていくことが、最終的には子ども達の英語力を高めていくことになるという気がする。今後進んでいく方向性としては、いかに交流していくか、ここにウェイトをもっていないと、学校の授業の中だけの問題になってしまいそうな気がする。それを危惧しており、今後はこの辺りに取り組む必要があるのではないかと考えている。西南学院大学には非常に協力をいただいて、子ども達も楽しんでいる。しかし数が限られているので、これを広げていきたいとは思っている。

もう一つの異文化については、子ども達への対応もそうであるが、その裏には家庭支援がある。保護者への支援。この辺りを地域振興や地域福祉等と連携しながら進める必要がある。海外から来られた子どもは、自分の学校の良さや問題点を体験しながらそこに溶け込んでいくが、その裏には親御さんがこの糸島にどう馴染んでいただけるか、どういうふうな糸島の社会に馴染んでいっていただけるか、これが今後の考えとして、非常に重要ではないかと思う。学校でただ通級をやっているだけでは、なかなか異文化理解にはならないんじゃないかという感じがしているので、この辺りもしっかりと市長部局と連携していくことが非常に重要になる。親御さんたちの中には非常に不安を抱えて糸島で住んでいる方もおられるんじゃないかなと思う。もしこれを具体的にしていけば、支援員を増やしていくことは必要であるが、その辺りに取り組んでいかな

いと、なかなか異文化理解という形にはなっていないし、外国人支援教育にはなっていないのではないかと考えている。

■泊委員

異文化で思い出したが、早良高校の上にオイスカという国連の組織があるが、そこが東南アジアの農業研修生をたくさん受け入れていて、いろいろな国の方がいる。糸島農業高校時代には、彼ら研修生を糸島農業高校に呼んで、子ども達と交流したりしていた。同じようなことがもしできれば、小中学校とかに来ていただいて、その時に外国籍の保護者の方も一緒に、日本の子ども達と交流をする。文化の違いというのは、すごく刺激があって、共通理解できる場所もたくさんある。糸島農業高校で勤務しているときに気づいたことだが、子ども達が日本のことを聞かれて答えられなかった。ところが外国の人は自分の国の良いところを言える。そういう所から異文化との交流はすごく刺激になるので、そういうところを活用していただければと思う。

■月形市長

私が学生時代その通りだった。自分の国のことを話せなかった。だからこそ、いとしま学をぜひやりたいと思った。

本当に貴重なご意見をいただいた。今はスマートホンとかが進んできて、これで翻訳はできるから勉強しなくてもいいと思っている子もいる。しかしやはり自分の頭で考えて、それを言葉に変えられるというのは大切なことで、教育長が10年以上に渡って、糸島の子ども達が英語でコミュニケーションが取れるということを目指し、きめ細やかな英語教育を実践できているのではないかとと思っている。これが一部の生徒ではなくて、糸島の中学生全部が恩恵があるんだということを感じてもらいながら、しっかりと英語の力をつけていっていただくために、また教育委員会にもご努力いただきたいと思っている。

もう一つの外国にルーツを持つ人たちについては、英語圏であればまだ楽であるが、英語圏以外の方々もたくさん糸島にお越しにいらしており、その中で生活をしてある。なので学校現場は大変だとは思いますが、いかにサポートできるか、これからも皆様のご意見を伺いながら、現場から上がってきた声を確実に形に変え結びつけていきたいと思うので、これからも忌憚のないご意見をいただきたい。

(3) その他の協議事項

■月形市長

その他の事項として委員の皆様からご意見があればお伺いしたい。

■松尾委員

要望になるが、先ほど人口減少の問題を言われてあったが、そういう時代であるけれども、糸島は若い世帯の家族がどんどん移住してきていると思う。それで若いお父さんやお母さんと話をする機会があった時に、糸島市運動公園などはできているが、現在子ども達に人気のあるスポーツをするところがない。東京オリンピックやパラリンピック、パリオリンピックの影響で、スケボーはボルダリング、BMX など、一昔前とは違うスポーツが流行りだしている。これは費用もかかることなので簡単にはできないかもしれないが、やはり若い親御さんたちは子どもと一緒にスケボーを楽しみたいという要望があるが、空き地や自然がいっぱいだからそういう場所があるかと思って来てみたらかななかななくて、道路でするには危ないし、と言われていた。なのでどうしても遠いところに連れていくしかない。やはり今の主流というものがあると思うので、今後そういう部分の整備というのも一緒に加えていただくと、もっと若い人たちが移住してくるのではないかな。

■月形市長

そのようなニーズをしっかりと把握しながら、実現できるところは進めていきたい。

【閉会】

■月形市長

以上をもって、令和6年度第1回糸島市総合教育会議を閉会する。

糸島市総合教育会議規則第9条第3項の規定に基づき、ここに署名する。

(糸島市長)

(議事録署名構成員)
